キラリと輝く多摩の歴史・文化・自然・現在を記録し発信するフリーマガジン

ミコタマ

mico tama

帝京大学総合博物館
多摩のヨコガオ発見プロジェクト
フリーマガジン 2024　第8号

TAKE FREE

本屋のつくる世界

人に根付く本を狩る
国立の生活の一部に
人に、自分に、優しく生きる
思い出の一冊との出会い
本当の豊かさを創る書店

表紙写真

ユマニテ書店にて。
たくさんの古書に囲まれる空間は圧巻。

(2024 年 5 月 27 日)

本誌の編集について

本誌『ミコタマ』は、帝京大学総合博物館（帝京大学八王子キャンパス内）で展開中の「多摩のヨコガオ発見プロジェクト」の一環として作成しています。プロジェクトについては裏表紙をご覧ください。
本誌の企画・取材・執筆・デザインは、帝京大学総合博物館の指導のもと、すべて帝京大学に在籍する学生が中心に行っています。

Contents

キラリと輝く多摩の歴史・文化・自然・現在を記録し発信するフリーマガジン

ミコタマ mico tama

帝京大学総合博物館
多摩のヨコガオ発見プロジェクト フリーマガジン 2024 第8号

「ミコタマ」の名前の由来

ミコタマとは、ラテン語の「輝く」という意味のミコ（Mico）と多摩地域のタマ (Tama) を合わせた言葉です。キラリと輝く多摩の魅力を本紙を通じて記録し、発信したいとの思いを込めました。

帝京大学総合博物館について

本館は 2015 年 9 月に帝京大学八王子キャンパス内に開館した博物館です。
帝京大学の持つ貴重な学術資料や最新の研究成果を、展示や講座などを通じて社会に広く公開しています。どなたでも入館できます。ぜひお越しください。

- Web サイト：https://teikyo.jp/museum/
- X(旧 :Twitter)(@Teikyo_Museum)：https://twitter.com/Teikyo_Museum
- Instagram（@teikyo_museum）：https://instagram.com/teikyo_museum/
- YouTube：https://youtube.com/channel/ UCFAxF_ST2oZoyFkrc3SfU-Q

書籍を見て楽しむこともできる。（2024 年 6 月 22 日 みちくさ書店にて撮影）

特集　本屋のつくる世界

08 ユマニテ書店
～人に根付く本を狩る～

10 みちくさ書店
国立の生活の一部に

12 マルジナリア書店
人に、自分に、優しく生きる

14 ねこじたゴリラ堂
思い出の一冊との出会い

16 野崎書林
本当の豊かさを創る書店

20 本屋の本
ミコタマ編集部と共読サポーターズが薦める

22 ミコタマ通信

23 編集後記

3 ユマニテ書店

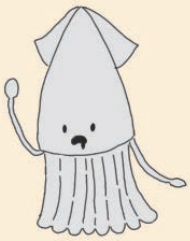
国立市東２丁目 6-29

4 野崎書林

東久留米市本町１丁目 3-1
東久留米本町ビル 1F

5 ねこじたゴリラ堂

小平市花小金井５丁目 29-10



1 マルジナリア書店

府中市片町２丁目 21-9
ハートワンプラザ３階

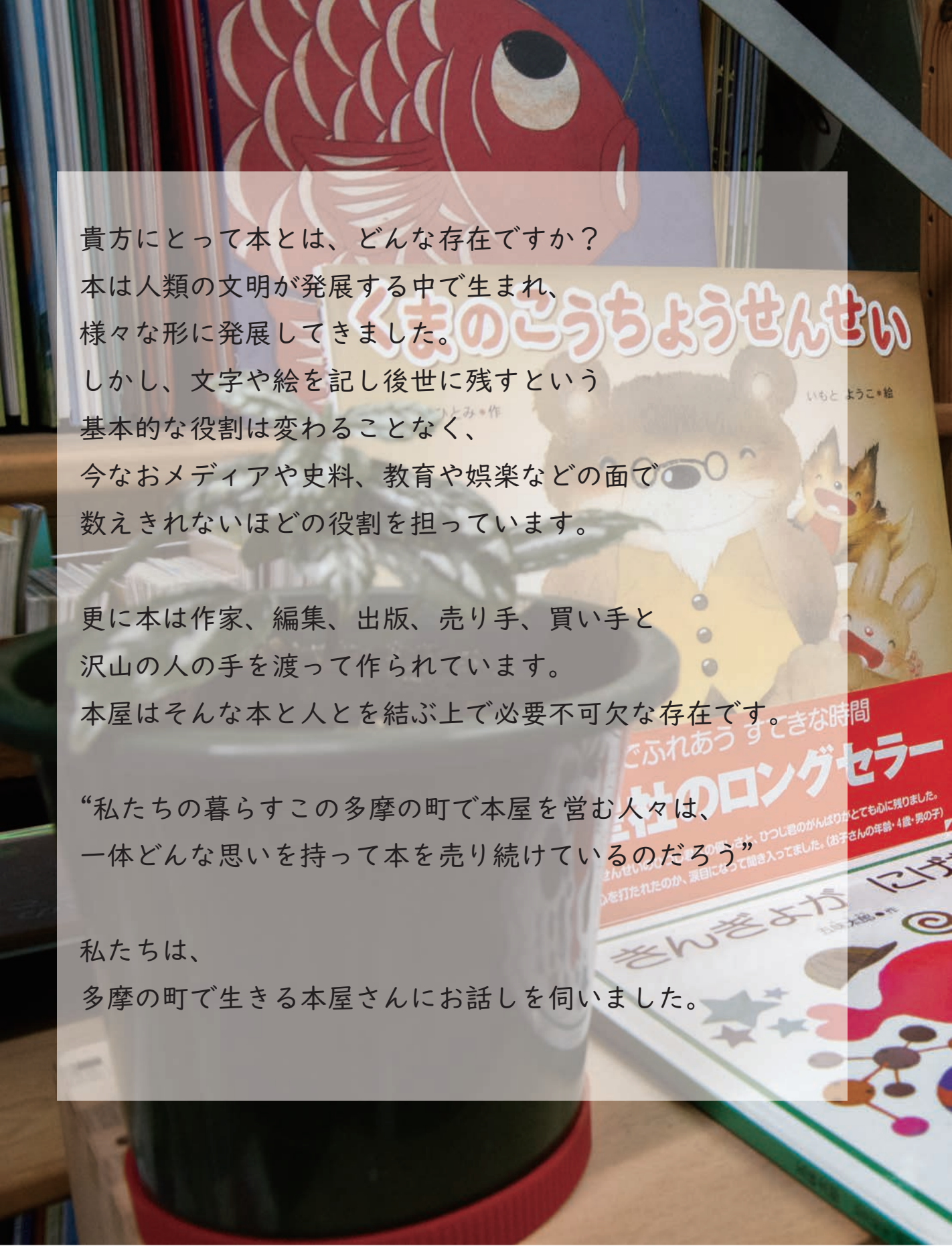
2 みちくさ書店

国立市東１丁目 4-6
国立デパート１階

今号の取材マップ

※地理院地図（国土地理院）を加工して作成

2024年6月15日　ねこじたゴリラ堂



貴方にとって本とは、どんな存在ですか？
本は人類の文明が発展する中で生まれ、
様々な形に発展してきました。
しかし、文字や絵を記し後世に残すという
基本的な役割は変わることなく、
今なおメディアや史料、教育や娯楽などの面で
数えきれないほどの役割を担っています。

更に本は作家、編集、出版、売り手、買い手と
沢山の人の手を渡って作られています。
本屋はそんな本と人とを結ぶ上で必要不可欠な存在です。

“私たちの暮らすこの多摩の町で本屋を営む人々は、
一体どんな思いを持って本を売り続けているのだろう”

私たちは、
多摩の町で生きる本屋さんにお話しを伺いました。

ユマニテ書店

～人に根付く本を狩る～

森林のように、鬱蒼と立ち並ぶ本に目を惹かれた。

林立する本の山を分け入ると、その奥でひとりの男性が迎え入れてくれた。この方が「ユマニテ書店」の店主、宮國恵次さんだ。

学生街と呼ばれるこの街で、彼が本を売り続けたその時間についてお話を伺った。

海外事業部から本屋に

元々は商社に勤めていたという宮國さん。海外留学の経験を買われ、海外事業部に配属された。そこでの仕事は辛くもあったが、楽しかったという。

転機が訪れたのは約一年後。アフリカへの転勤を言い渡されたときである。当時の宮國さんには、小さな子どもがいた。家族を連れてのアフリカ。転勤は十年に渡ることもあるという。宮國さんは転勤を断り、他の部署への異動を上司に打診した。

しかし「華の海外事業部」からの異動は、それ相応の烙印を押されるという意味に他ならなかった。「長くサラリーマンを続けるつもりはない」と考えていた宮國さんは、これをきっかけに退職することに決めた。上司から考え直すように言われ、三カ月の休職期間をもらったが、その間も考えは変わらなかった。

その休職期間に、ユマニテ書店開店に至るもうひとつの転機が訪れる。当時、どうにかお金を稼ぎたかった宮國さんは、フランスにいる大学時代の同期に相談していた。するとその同期から「日本の本を売ってくれ。フランスで人気があるんだ」と、頼まれた。宮國さんは休職中に、他の同期から翻訳の仕事ももらってはいたが、会社にバレて思うように仕事ができなくなっていた。その矢先にこの提案である。すぐに神田の方へ行き、本を数冊買って友人に買い取ってもらった。

これが上手くいき、頼まれる本の冊数も増えた頃、決算の大変さに悩んでいた。そこで、宮國さんを介さずに、直接フランスの同期の元へ送ってくれるよう本屋さんへ頼みに行ったという。

しかし、どの本屋にもフランス語やドイツ語などの外国語を理解している店主はいなかった。「じゃあ自分でやるか」。宮國さんはそう思い至り、三鷹の貸店舗に小さな本屋を開いた。これが「ユマニテ書店」開店の第一歩である。

とにもかくにもお金が無かった宮國さんは、当時「ちり紙交換」の人たちが持っていた古本を買い取って店に置いた。するとちり紙交換の人たちも宮國さんを「本を買い取ってくれる人」と知り、たくさん売ってくれるようになった。

三鷹の地から順調にスタートした古本屋は、数回の移転を経て、現在の国立の地へと落ち着いた。

数々の洋書や学術書も扱っているユマニテ書店では、「誰がこんな難しい本を読むのか」といわれることもあるそうだが、そこはさすが学生街。学生や大学教員が買って行ったりするそうだ。

基本となる本

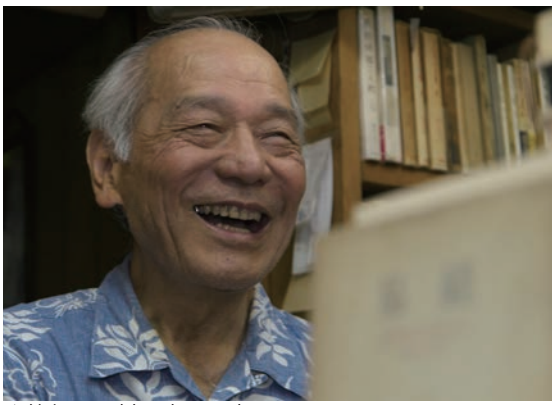
「どれを読んだらいいか」と聞かれることもあるという。宮國さん曰く、本を選ぶことは時間のかかるものらしい。道草を食いながら、無駄

に時間を潰しながら選んで読み、その中から関連するものをまた拾い上げる。

森に分け入って探す、狩りのような作業。この「本をチョイスする能力」が足りていない学生は多く、チョイスできて一人前だと宮國さんは語った。

宮國さんがどのような本をチョイスして店に置いているのか、気になって質問した。すると、「古典も含めて、あまり流行を追うんじゃなくて、やっぱりこれは必要っていう基本書はまず置くようにしています。流行り廃りがあるものは処分したり」と、答えてくれた。さらに「大事になるもの、根幹になるものは他の本屋から買ってきたり。売れる・売れないに関わらず、同じような本でも置くように」と、根幹となる本を大切にしている姿勢を示してくださった。

本だけでなく、宮國さんの人の根幹にも関わろうとする姿勢が実際に発揮されたエピソードがある。それは以前この書店でアルバイトをしていた大学生の話だ。


▲笑顔で取材に応じる宮國さん

その学生は当時近くの大学に通う社会学部の二年生で、将来について悩んでいたという。

「本当は弁護士になりたくて。今からでも法学部に転部しようと思っている」と言った彼に、宮國さんは「転部しなくても弁護士にはなれる」と説得した。

その学生は宮國さんの元でアルバイトをしながら、何度も司法試験に挑戦した。宮國さんは今でも、彼が司法試験の合格を報告しに来たときの表情が忘れられないという。「入ってくるなり『受かりました』って」。そう話す宮國さんの表情は柔らかなものだった。

その彼は今、弁護士として遠く福岡の地で働いている。学会などで東京に来るたび、子どもを連れてこの書店に足を運んでくれているそうだ。

＊ ＊ ＊

宮國さんは本をチョイスすることを「森で狩りをする」と例えた。狩りというと、弓矢や鉄砲を持って獲物がくることをじっと待つような場面が想像される。動物を待つだけの受動的な行為に思えるが、獲物を捕らえること自体は能動的な行為だ。

本をチョイスすることも、他人や本屋任せの行為ではなく、自分から本の森に分け入るその一歩が大切なのだと思う。

宮國さんが学生街で本を売り続けた時間は、立ち寄った学生たちの将来を芽吹かせ、成長していった時間なのだと感じた。

小島七菜（教育文化学科3年）＝文・デザイン
児玉悠斗（心理学科2年）＝写真

▲外から見たユマニテ書店

国立の生活の一部に

古本屋、みちくさ書店を訪ねる

みちくさ―目的の所へ行き着く途中で、他の物事にかかわって時間を費やすこと。（デジタル大辞泉より）一見無駄なことのように思えるが、人生案外そういう時間が大事だったりする。寄り道をしてほっと一息つく、誰にも邪魔されないあの時間。そんなみちくさの名を冠する古本屋が国立にある。

JR国立駅南口を出て五分ほど歩いた先、「楽しいお買い物の散歩道」をうたう国立デパートの一階に、その古書店はあった。

今回の取材にあたって、番頭の青木耕史（あおきこうじ）さんにお話を伺うことができた。

▲古書でいっぱいの店外

「みちくさ書店」という店名は店主の早川伴司（はやかわともじ）さんが38年前に命名したという。今回取材で会うことは叶わなかったが、気軽に立ち寄ってもらえるような名前をつけたらしい、と青木さんが教えてくれた。

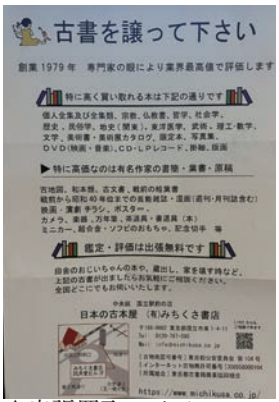
値段のつかない本も多いけど

店頭に出す本は学術、思想、社会科学、哲学、美術図録が多い。特に新書には力を入れており、近くに一橋大学や武蔵野美術大学があることが理由だという。他にもレコードやCD、美術品に雑貨や絵本が所狭しと並んでおり、まるでいつか夢に見た秘密基地のようだった。

みちくさ書店が力を入れている事業に、出張買取がある。私たちがみちくさ書店に取材に伺った際、青木さんは丁度買取から帰ってきたところだった。荷物車の荷台に積まれた大量の本を店内に運び値段をつける。出張先は多摩地域が中心で、亡くなられた親御さんの遺品整理の依

頼が多いという。どの本にも持ち主がいて、大切に読まれてきた本だ。値段のつかない本も多いけれど、青木さんはその一冊一冊を大切に扱っていた。

▲快く取材に応じてくださった青木耕史さん



▲出張買取のチラシ

古書店と町

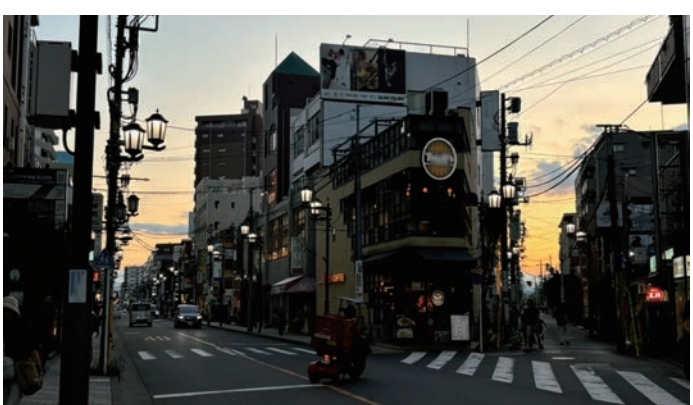
「大それたことじゃないけど、地域の方に必要とされる、地域に必要な一つの店。国立市の中に腰を据えて、経営をしていければいいな」。青木さんにみちくさ書店の将来の展望を伺ったところ、このように答えてくれた。青木さん自身が「みちくさ」を体現しているようだな、と思った。仕事やタスクに追われる人が多い中、青木さんは忙しくても自分の好きなように日々を生きている。町の中で当たり前に愛される一つの店として、地域住民から買い取った本をみちくさ書店で売っている。そして、地域の別の人がその本を購入している。地域と人と本をつないでいる。「みちくさ書店を国立の生活の一部に」という思いで書店を営む青木さんは楽しそうだった。

人生と古書店経営

実のところ、青木さん自身はあまり本を読まないのだそう。財政面が厳しいときもあるが、それでも続けられるのは第一に楽しいからだと笑って話してくれた。「やっていて面白いし、今働いていてストレスを感じていて……、みたいな人は多いけど、この仕事にストレスはありません。僕は自分に定年はないと思っています。体が動く限りは働いていたいと思っていて」。

人生はこうでなくちゃいけない、幸福でいる為にはこう在らなくちゃいけない、という固定観念や、それに対する焦燥感というものを抱えている人は多い。青木さんのような誰かの街並みの一部になるような生き方は、当たり前にできるようでいてとても難しい。青木さんに話を聞いているうちに、自分が勝手に作っていた生き方の理想像が崩れていくような気がした。器用に、向上心高く生きることが美徳とされるこの世界で、みちくさ書店の在り方は優しく、私もこうあれたら、と感じた。

広野楓花（日本文化学科2年）＝文・写真・デザイン
児玉悠斗（心理学科2年）＝写真
小島七菜（教育文化学科3年）＝取材協力


▲国立の街並み

人に、自分に、優しく生きる マルジナリア書店

「優しく生きるための書店」。そうキャッチコピーのついた書店がある。優しく生きるとはどのような生き方だろうか。ただ単に「人に親切にしましょう」だけでは説明のつかない感覚を受ける。

分倍河原駅をの改札を出て、目の前のビルに入り、三階まで上ると店舗入り口に出る。マルジナリア書店へ入ると、明るい店内と所々の植物も相まってしっとりと落ち着いた雰囲気だ。棚に並べられている本に目を向けると、さまざまなジャンルの本が並んでいる。しかし散漫な印象は受けず、後ろにしっかりとした、背骨のような芯が通っていると感じ取れた。

今回はマルジナリア書店の店主の小林えみさんにお話を聞いてきた。

▲店主の小林えみさん

出版社は書店を持つべき

マルジナリア書店を立ち上げる前は大手出版社に勤めていたという小林さん。その際、自分の担当していた書籍が時間の経過とともに書店の棚から姿を消していく光景を目の当たりにしていた。書店は、偶発的な本との出会いも魅力の一つだ。新刊を主に扱っている総合書店などでは、毎日膨大な数の新刊本が入荷されている。その数を捌きながら店舗に既刊も残すのはかなりの負担となるだろう。特に小さい出版社の本は棚から消えてしまいやすい。前述の体験と、本を手に取れる機会を保障するため、「小さな出版社は自社の刊行した書籍を置ける書店を持つべきだ」という考えのもとにマルジナリア書店をオープンさせた。

実際、マルジナリア書店では小林さんが経営している「よはく舎」という出版社の本を置いている。

優しく生きるための書店

「優しくあるためには余裕が必要であり、余裕の種類は人によって違う」とは小林さんの弁。「優しく生きるための書店」というキャッチコピーには、「知ることによって新たな世界が開け、自分や他の人を助けられると気が付く手伝いが出来たら良い」との思いが込められている。棚には人文学的な本を中心とし、考える足掛かりとなるような本が並んでいる。取り扱い説明書のようにすぐに役に立つ本ではなく、きちんと自分の中で咀嚼し、消化し、思考の基盤となるような本だ。

一例として星空の図鑑（※）を見せていただいた。この本は日常生活の役に立つことはあまり無さそうだが、装丁、内容、全ての完成度が高い本だった。小さいころに持っていた徳間書店の『MAPS』という世界地図を想起させた。この本も実用性はあまりないが、確かに今の私を形作る基盤となっている。

本が、猫のように、気が付いたら人の隣にある。知識や楽しみを与え、時には叱責してくれ、知見が広がっていく。そんな関係性が理想的だ。

本と情報と文化

地方と関東の情報量はとてつもなく差がある。筆者は進学を機に上京してきた身だが、実際、東京に住み始めた頃は、情報の取捨選択が追いつかず、オーバーフローしかけたほどだ。ここでいう情報は後に文化となるもの、ないしは文化を知るためのものだ。本は文化を生み、文化は本を生む。「全ての地域に本屋が十分に在るのが理想。しかし、現実問題そうはならず、その穴を埋められるのが図書館だと思う」と小林さんは語った。マルジナリア書店では図書館や、図書館学の書籍にも力を入れている。

本とは地域の文化と個人の経験を支えるものなのだ。

＊　＊　＊

「人に優しくしましょう」生きていて、何度も耳にした言葉だ。人に親切にすることだと思っていた。しかし、今、「優しく」という言葉の持つ重さに気が付いた。「優しく生きる」意識してみると、途端に動けなくなる。片方への優しさはもう片方への凶器になり得ることもある。自分の選択の結果をシミュレーションし、最適な選択をするには経験値が必要だ。人が自分の選択から得られる経験値はそんなに多くない。月並みだが、本を読み、経験し、顧み、思考する。この流れが大切なのだと原稿を書き終え、気が付かされた。

児玉悠斗（文学部心理学科3年）
＝文・写真・デザイン

※『天空を旅する星空図鑑：美しい星図を眺めながら神話と芸術と科学の歴史を楽しむ』
エレナ・パーシヴァルディ著
シカ・マッケンジー訳
翔泳社、2024
ISBN：9784798183558

▲店内は人文書を中心とし、温かみのある空間だ

▲一階にマクドナルドの入っているビルの三階にある

ねこじたゴリラ堂

思い出の一冊との出会い

▲店主はいつもここでお客さんを待っている

ねこじたゴリラ堂は絵本を専門とした古本屋である。なんともインパクトのある店名は、「猫舌でゴリラ顔」な店主ゴリさん（佐藤匡弘（さとうただひろ）さん）に由来する。体育会系のゴリさんは、いわゆる真面目そうな本屋の店主のイメージとは異なり、「日本の中で一番絵本屋っぽくない絵本屋の店主だと思う」と笑いながらおっしゃっていた。

絵本の面白さに気づく

ゴリさんはねこじたゴリラ堂を始める前は、中古本を扱うブックオフで働いており、古本屋のノウハウは分かっていた。

ブックオフをやめた後、大学生時代に子供向けのボランティアで絵本の面白さに気付いたことが決め手となり、本屋を開くことにした。その際、普通の本屋を始めるよりも子供と絵本に特化したほうが面白いと思ったことで、絵本を専門にした古本屋を始めることを決意したという。

お店には幼稚園ぐらいのお子さんをもつ親や、絵本好きな人、保育園の先生など、幅広い層の人がやってくる。

三冊は残した方がいい

ねこじたゴリラ堂では絵本の買い取りも行っている。絵本を売りに来るお客さんは、子育てが終わって片付けたいという人もいれば、引っ越す人、親の本を整理したいという理由で来る人もいる。買い取りの話でゴリさんが言うのは、「好きな絵本は三冊ぐらい取っておいたほうがいい」ということだ。というのも、絵本は絶版になると二度と手に入れることができないからだという。子供の頃に読んでもらった本を自分の子供にも読んであげたいという親は多い。お客さんの中には、ゴリさんのその話を聞いて、売るつもりで段ボールいっぱいに持ってきていた絵本をほとんど持ち帰ってしまった人

もいたそうだ。「商売としてはダメなんだけどね」。そう笑いながら話すゴリさん。絵本屋ならではというより、ねこじたゴリラ堂ならではのエピソードを聞いて、たびたび笑いが起きた。

絵本の表紙の力

ゴリさんが絵本屋を始めるときに一番したかったことは、絵本の表紙が見えるように壁一面に置くことだった。「絵本を売るなら表紙を見せなければ意味がない！」と思ったそうで、当初から現在のような絵本の置き方をイメージしていたという。

「自分のお店が誰かの人生にとって、何かの出会いの場になることはあるのかもしれない」と語るゴリさん。お店を訪れたあるお客さんは、絵本の表紙を見て「あっ！この本お母さんに読んでもらったことある」とその場で絵本を手に取り、ページをペラペラとめくったあと、「私って愛されていたんだなあ」としみじみ思い返していたという。大人になるにつれ、幼少期の記憶というものはだんだんと薄れていくものだ。しかし、絵本の表紙を一目見ただけでその頃を思い出し、自分に注いでもらった愛情を感じることができるのは、とても素敵で嬉しい出来事だ。

「絵本じゃなくてもいい」

ゴリさん自身は、絵本を読んで育ったわけではなかった。「絵本があるから親子の絆が深まるとは思っていない」と、絵本に対する考えを聞かせてくれた。「一緒に料理をしたり、お喋りをしたり、いろんな子育ての仕方があると思う。絵本が好きな人だったら、お子さんに読んであげたらいいんじゃないかな」自身の経験から、絵本が誰かの思い出の一つになればいい、そのきっかけの一つを提供できたらいいと考えるゴリさん。絵本が家族のコミュニケーションや教育に役立つという考えは、よくある話だ。私もそう思っていた。しかし、それをなんでもないことのように話すゴリさんの姿を見て、私の絵本に対するイメージはガラリと変わった。

▲笑顔が印象的なゴリさん

絵本との素敵な出会い

「人には人の人生があり、他人がどうこう言うよりも、その人自身が良いものや素敵なものに出会うことができればそれが一番だ」ゴリさんはそう考える。自分のお店の絵本を押し付けがましく人にすすめるようなことはしない。自分がいいなと思った絵本が、それに興味をもった人に読んでもらえる可能性が高まるのなら、おすすめ程度はするとゴリさんは語る。絵本のすぐそばには、思わず手に取って読んでみたくなるような手書きの文言が添えられている。ポップが付いている絵本は「おすすめしたくなっちゃう本」だそう。そう言いながら豪快に笑う顔が素敵だった。

＊ ＊ ＊

改めて店内を見回すと、カラフルな絵本が壁一面に広がり、ゴリさんの温かい人柄と、絵本だけにとどまらないものの考え方をより感じることができた。

また、かつて私が読んでいた絵本、読んでもらっていた絵本たちが壁に何冊も並んでいるのを見て、当時の無邪気な気持ちや楽しかった幼稚園時代を思い出した。

彦坂菜々子（史学科2年）
＝文・デザイン
児玉悠斗（心理学科2年）＝写真
北澤那由太（心理学科2年）＝取材協力

本当の豊かさを創る書店

▲野崎書林の看板の前で笑う専務の野崎林太郎さん

西部池袋線東久留米駅西口から、徒歩一分にある野崎書林は、マルシェと書店を併設した珍しい書店だ。マルシェでは、地域の農家が卸した野菜や地元で生産される工芸品などを販売し、東久留米の魅力を伝えるスポットになっている。今回は野崎書林の専務である野崎林太郎さんにお話を伺った。

農ある豊かな暮らし

江戸時代から続く農家の長男として生まれた野崎林太郎さん。野崎さんが運営を行っている奈良山園は、毎年ブルーベリーやキウイフルーツなどの摘み取り体験や加工品で、地元の人たちから高い人気を誇っている。奈良山園の理念でもある「農ある豊かな暮らし」を掲げながら、東久留米の自然の豊かさをたくさんの人たちに伝えるため様々な活動を行っている。それは、野崎書林にも共通した特徴だ。

自分たちの手でできる限り

２０２０年に店内を改装した際、野崎さん含むスタッフさんたちは、できる限り自らの手で改装を行った。店内には強いこだわりがあるそうだ。

小さいお子さんをターゲットにしている絵本コーナーは、他の書棚より低くすることで、子どもの目線でも見やすいように工夫をしている。またガラス張りの壁面を活かして、外からでも店内の雰囲気が分かり、新規のお客さんでも入店しやすいように意識して設計したそうだ。

▲店内の書棚

あって嬉しい無いと寂しいもの

「お店を経営するなかで、印象深いお客さんはいましたか？」という質問に対し、興味深い答えが返ってきた。

「店内を改装した際、一時的に閉店したんです。その時に『お客さんからやっぱりお店閉じちゃうのね。残念だわ』と言われた。人によっては書店は月に一回行くかどうかの場所です。日常の生活で行く回数は少なくても身近な場所がなくなるのは、寂しいって思ってもらえるんだな」。

確かに、スーパーマーケットやコンビニエンスストアと違って、日々の暮らしで頻繁に訪れる場所ではない。またインターネットが普及した今、書店に訪れなくても本を購入できる。それでも、このお客さんにとって野崎書林は無くなると寂しく、生活を彩るのに不可欠な存在なのだ。

実際に触れることで

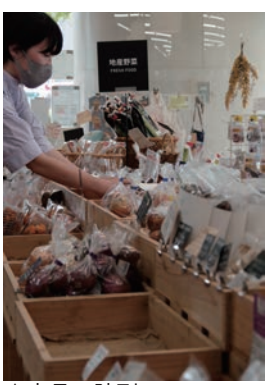
野崎さんは実店舗を構える本屋だからこそ持つ強みがあると考える。オンラインショップで本を購入するときは自分の検索履歴から自動的におすすめの本を選出してくれるし、自宅まで商品を届けてくれる。しかし、店舗で本を選ぶときには、自分が興味ある分野の本を自動的に選出してくれない。自分の足で店内を散策することで本を選び購入する。自分の足で自宅まで帰りじっくりと本を読む。その行為があることで、興味が無かった分野の本に出会い、新しい世界を得られる機会があるかもしれない。偶然読んだ本が、後の人生の指針と成りうるかもしれない。それが実店舗を構える書店が持つ最大の長所だと野崎さんは語ってくれた。

本当の豊かさとは

「豊かさ」と辞書を引くと「経済的に恵まれていて、ゆとりのあるさま」と記載されていた。確かに、豊かさと聞くと多くの人たちにとって経済的に余裕がある様子を連想すると思う。しかし、野崎さんが考える豊かさとは財力が豊富な様子や社会的地位の高さではない。日常の生活の中で普遍的に存在する小さな幸福のことを示すそうだ。例えば親子で「ウォーリーをさがせ！」を読んでいたら、親より先に子供がウォーリーの姿を見つけることで、我が子の成長を実感した。好きな本を一人で読めるようになった。このような小さな幸福に野崎書林が貢献できたら嬉しい。それが野崎書林にとっての今後の目標だということだ。

北澤那由太（心理学科2年）
＝文・写真・デザイン
児玉悠斗（心理学科2年）＝写真
難波咲帆（史学科2年）＝取材協力

▲地域で収穫された野菜の販売


▲商品の陳列

▲東久留米市の出版社「共和国」の本

本は私たちの世界を広げます。
本から得たものは私たちの人生を構築し、
生活の一部となります。
そんな本と人とを結ぶ懸け橋となるのが、本屋です。

私たちは今回の取材を通し、多摩という土地で、
本を通じて人と繋がることを選んだ方々の話を伺いました。
皆それぞれに届けたいこと、残したいものをがあり、
その全てが多摩の街をつくっていました。

「本屋のつくる世界」
最初このテーマで記事を書こうと決めたときは
言葉の輪郭がうまくイメージできず、不安もありました。
しかし実際に話を聞くと、本屋が本屋という役割を通じて
広げるものの大きさに何度も驚くことになりました。

土地や人、店のこだわり、その色々が混ざりあって
本屋はそこに在ります。
本屋はそこで、いつでも私たちを待ってくれています。

2024年10月24日　みちくさ書店

ミコタマ編集部と
共読サポーターズが薦める

本屋の本

共読サポーターズとは

「共読」とは、本を読み合い、薦め合い、評し合う読書のかたち。帝京大学メディアライブラリーセンターでは「共読ライブラリープロジェクト」を立ち上げ、「共読」を盛り上げるべく活動中。共読サポーターズはその活動の中心になり、本や図書館の面白さを広く発信するために活動する帝京大学の学生です。

本者の本当の本物の物語

本に気持ちを込めて本気。

やり続けることで見えてくるものがある。

読むたびにそう思い表したくなって、その都度この先のことを考える。

この本は久住書房のおやじが残したこれからへの想いだ。それと男の意地だ。

長年店主をした店を閉めようと思った。しかし同じ時、息子が病気で倒れた。このまま店を閉めてしまえば、店を閉めたことの理由に息子を使ってしまう。その二つは関係ないのに。腹を括って店を再建することを考えた。なぜならもうおやじには店しか残ってなかったから。

始まるのはオヤジの快進撃。様々な企画を成功させていく。新潮文庫の売上げ１５０１～最下位までと、良い本が多いのに売れないちくま文庫、合わせて１５００点を集めた「なぜだ売れない文庫フェア」、このフェアの発展形で、始めてみたらお客さんが代わる代わる読むようになった店内での「朗読会」。それから、勉強になるかどうかは考えない中学生向けの本を集めた「本屋のオヤジのおせっかい中学生はこれを読め！」、これは「小学生はこれを読め！」「高校生はこれを読め！」と続く。また講演を開けるカフェ「ソクラテスのカフェ」を開き、くすみ書房のオススメ本が年４回届く「くすみ書房友の会『くすくす』」。その全てを成功させた。まだまだアイディアは途切れず「中学生の本棚」と「高校生の本棚」がある本屋を作る「奇跡の本屋プロジェクト」、中高生が夢中になれる感動する本屋を作る「THE BOOKs green」へと進んでいく。

この歩いた道の長さを想像しただけで私はこのオヤジをずっと尊敬しようと思った。

最後のプロジェクト『奇跡の本屋をつくりたい』は叶うことはなかった。道の途中でオヤジはこの世を去った。しかしそれをやりきれなかったと思うことはなかった。なぜならこの本が残った。

後世に残したいものを書いたのが本だ。これは本物の本だと思う。

『奇跡の本屋』は人に本を薦めようとする一人一人の心にある。

小林捺哉　元共読サポーター
（初等教育学科２０２１年度卒）

帝京大学ＯＰＡＣより転載
投稿日２０２１年12月７日

◀『奇跡の本屋をつくりたい：
くすみ書房のオヤジが残したもの』

久住邦晴 著
ミシマ社 ,2018
ISBN:9784909394125

単なる嗜好品を扱う場所ではない、そこになければならないもの

２０１１年３月11日の東日本大震災、岩手県釜石市にある、さわや書店釜石店は津波の被害を免れた。他店勤務だった田中さんたちが帰宅困難覚悟で応援に向かうと、書店には目を疑う光景が広がっていた。それは、津波で流されたわけでもなく、混乱に乗じて盗られたわけでもない、純粋に本を求めた人たちが大勢いたことによってほとんど空になった本棚だった。インターネットの復興に時間がかかる中で人々が心の拠り所として選んだのは、紙媒体の、いつどんな時でも読み返すことができる「本」だったのだ。

この体験から、田中さんの本屋の棚は「本屋が何をしたいか」ではなく「お客さんが何を持ち帰りたいか」というところに焦点を置いて、お客さんを巻き込んだ品揃え・本棚であることを心がけるようになった。日々本に出会う場は、ネット書店にもあるかもしれない。でも、だからこそリアルの書店にしかないことが意外な宝物だったりする。

読みやすい語り口調でまちの本屋の未来を見据えながら、「本屋さんは意外と地域にないと寂しい存在かも？」と気づける１冊ではないかと思う。

難波咲帆（史学科２年）＝文

◀『まちの本屋
知を編み、血を繋ぎ、地を耕す』

田口幹人 著
ポプラ社 ,2019
ISBN:9784591163009

書店の「謎」とは？
有栖川有栖『本と謎の日々』

ミステリー作家の有栖川有栖の短編小説。書店をテーマにした作品集『本屋さんのアンソロジー：大崎梢リクエスト！』の一編として執筆された書店ミステリーである。ミステリーといっても、稀覯本をめぐって殺人事件が起こるわけではない。新刊書店を舞台に（アンソロジーのテーマは新刊書店限定）、大学生アルバイトが出会う謎を、店長が推理し解説していく。

亡くなったはずの客、帯や箱が痛んだ本をありがたいと言う客、返品に来てクレームを言う客、手書きＰＯＰの盗難、暴風雨の中を閉店間際に来店した怪しげな客。作者が書店に勤務していた経験と創作が混ざっているそうだ。

「店頭はステージだ。日々、即興のドラマが演じられる」という店長の台詞が印象に残っている。店長はいわゆる読書家ではなく、本の「潮風に吹かれて楽しむ」という感覚に私は共感できた。

書店と同様に図書館・博物館も様々な事情や志向を持った人を対象としている。ラストで語られる店長にとっての謎は、私たちにも共通の課題だ。

川北　友美
（帝京大学総合博物館・メディアライブラリーセンター職員）

◀『本屋さんのアンソロジー
大崎梢リクエスト！』

飛鳥井千沙 , 有栖川有栖 ,
乾ルカ , 大崎梢 , 門井慶喜 ,
坂木司 , 似鳥鶏 , 誉田哲也 ,
宮下奈都 , 吉野万理子 著
光文社 ,2013
ISBN: 9784334767860

以下の図書にも収録されています
『こうして誰もいなくなった』
有栖川有栖 著
ＫＡＤＯＫＡＷＡ ,2019

ミコタマ通信

2024 年 3 月～2024 年 8 月までのミコタマ編集部の活動をお伝えいたします。

ミコタマ各種 SNS

X(旧 Twitter）ユーザー名↓
@Teikyo_Micotama

instagram ユーザー名↓
teikyo_micotama

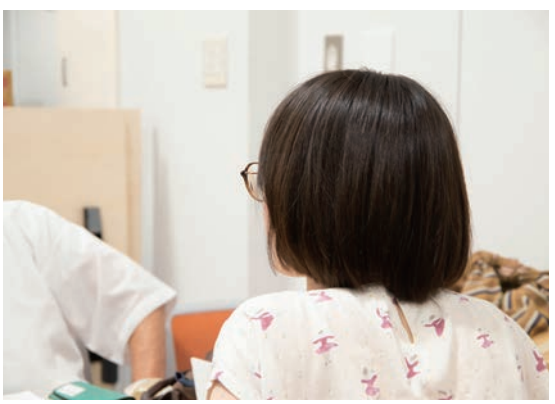
X（旧 Twitter）と Instagram を開設しています。刊行のご連絡や本誌設置場所の告知、記事で使用されなかった写真の掲載等をしていきます。SNS を通じて読者の皆様にミコタマをさらに身近なものに、また、私たちの活動をより深く知っていただける機会を広げていきたいと思います。ぜひフォローよろしくお願いいたします！

アンケートへのご回答をお願いします！

アンケートの URL ↓
https://forms.gle/8ozD3WT6Fqq3t15z6

本誌の読者の皆様からご意見・ご感想を受け付けています。本誌をより良い記事にするため、また、皆様との繋がりを持ちたいとの思いからアンケートを作成しました。アンケートの回答時間は最短で 1 分程度です。上記の QR コードまたは URL をご利用の上、ぜひご回答よろしくお願いいたします！

新メンバーが入りました



今年度からミコタマ編集部に新メンバーが 2 人加わりました。ミコタマが最高の一冊になるよう、日々意見交換しながら試行錯誤して記事を書いています。ミコタマに新たな風を吹かせる 2 人にご期待ください！

次号は八王子市特集です。お楽しみに♪

『ミコタマ』配送について

配送を承ります。

ご希望の方がいらっしゃいましたら、
帝京大学総合博物館までご連絡下さい。

※送料のご負担をお願いいたします
　在庫の無い号もございます

帝京大学総合博物館

多摩のヨコガオ発見プロジェクトフリーマガジン
『ミコタマ』編集部
〒 192-0395
東京都八王子市大塚 359 番地

https://teikyo.jp/museum/
TEL　042-678-3675
E-mail　museum@teikyo-u.ac.jp

帝京大学総合博物館
多摩のヨコガオ発見プロジェクト
フリーマガジン 2024 第 8 号

発行
帝京大学総合博物館

編集長
児玉悠斗
広野楓花
甲田篤郎

編集・デザイン
小島七菜〔4-5,8-9,24〕
北澤那由太〔16-17〕
児玉悠斗〔1-5,12-13,20-23〕
難波咲帆〔16-17,22,23〕
広野楓花〔4-7,10-11,18-19〕
彦坂菜々子〔14-15,22,23〕

※〔〕は担当ページ

ロゴデザイン
寺澤頼来
難波咲帆
彦坂菜々子

特別協力
都留文科大学　地域交流センター
フィールド・ミュージアム部門
『フィールド・ノート編集部』

校閲・管理
川北友美
甲田篤郎

印刷・製本
株式会社ムレコミュニケーションズ

発行日：2024 年 11 月 11 日
発行部数：2500 部

発行 / 編集
〒192-0395
東京都八王子市大塚 359 番地
帝京大学総合博物館
多摩のヨコガオ発見プロジェクト
フリーマガジン『ミコタマ』編集部

Mail
tamanoyokogaomicotama2020@gmail.com

Web サイト
https://teikyo.jp/museum/

X(旧 Twitter)(@Teikyo_Museum)
https://twitter.com/Teikyo_Museum

Ⓒ 2024『ミコタマ』編集部
乱丁・落丁の場合はお取り替えいたします。編集部までお知らせください。

編集後記

「 書店 」

しょう説やエッセイなど、“本を読む”ということのハードルが高く感じる人は多いでしょう。私自身、小学生の頃は家の本棚いっぱいに本があって、本を読むことが好きでした。しかし、進級・進学をするにつれて本を読むハードルが上がってきているように感じます。実際、私の周りの人に「活字の本を読むことは偉い」と言う価値観が根強いことからも、読書に対するハードルの高さがわかります。このミコタマ編集部には 8 号から新しく加わり、編集会議や取材に初めて参加し、今回の活動を通して改めて本の良さに触れました。データではなく紙であることでいつまでも手元に持っておくことが出来るところ、“瞬間の知識”ではなく“人生の豊かさ”を育むところ。そこに本の良さが詰まっていると感じました。そんな本との一期一会がある場所こそが本屋さんという空間なんだと思います。小さくも魅力にあふれたポップに魅かれて、一見興味のない小説のきれいな表紙絵に魅かれて、手に取って少し覗いた物語のはじまりに魅かれて……。学校の課題やバイトで忙しく、読書の時間なんて取れない、そもそも活字が苦手、という学生も多いと思いますが、今回私が感じた本の良さや本屋さんの魅力を知ってもらい、「本を手に取ってみようかな」と思う方が増えるといいなと思います。　　（難波咲帆）

てんき予報を見ると、毎日暑い日が続いています。ひんやりとした涼しい空気に包まれた本屋さんに一歩足を踏み入れて、面白そうな１冊を見つけるのは私にとって至福の時間です。今年の４月からミコタマ編集部に入った私にとって、今回の「本屋のつくる世界」というテーマは特別に感じ、初めて担当する号ということもあり責任感と期待でいっぱいでした。私はねこじたゴリラ堂に取材をさせていただいたのですが、直接お話を伺うまでは想像できなかった、古絵本屋を始めた経緯やお客さんとの心温まるエピソードを話す店主の姿に心が動かされました。本屋という場所は一見どこも同じように見えるかもしれません。しかし、その背景にはそれぞれ異なる物語があり、現在の本屋の形に至るまでの道のりや方向性は本当にさまざまです。今回の特集を通して、独自の空間を生み出す店主の熱い想いやこだわりを感じ取っていただけたら嬉しいです。　　（彦坂菜々子）

mico tama
ミコタマ
帝京大学総合博物館　多摩のヨコガオ発見プロジェクト
フリーマガジン 2024 第8号
発行日 2024年11月11日（年2回発行）
発行　〒192-0395 東京都八王子市大塚359番地 帝京大学総合博物館
多摩のヨコガオ発見プロジェクト フリーマガジン『ミコタマ』編集部

帝京大学総合博物館 多摩のヨコガオ発見プロジェクト

帝京大学八王子キャンパス周辺の自然、文化、歴史、現在に関する魅力を、帝京大学総合博物館が調査したことをもとにして広く社会に紹介するプロジェクトです。

「赤駒を　山野に放し　捕りかにて　多摩の横山　徒歩ゆか遺らむ」（万葉集）

放牧してある赤駒を捕まえることができなくて、険しいという「多摩の横山」を（防人に赴任する夫に）歩かせてしまうことになったよ。

この歌は、奈良時代に編まれた「万葉集」の歌の一つです。「防人」として武蔵国を離れて九州に赴任する夫を妻が気遣った歌です。「多摩の横山」と呼ばれる場所は、ちょうど帝京大学八王子キャンパス周辺にあたります。丘陵が、横に長く連なる様子を当時の人々は「多摩の横山」と呼びました。万葉集の頃の「多摩の横山」の面影は、現在は少なくなりつつあります。ですが、しっかりと目を凝らしてみると過去の面影を感じ取ることのできる場所が残っています。そして、それらの場所には過去から現在までの人々の営みが連綿と続いています。このプロジェクトは「多摩の横山」に残された自然や文化、歴史、そして現在の人々の営みに光を当てて紹介するものです。普段は何気なく通り過ぎて気がつかない魅力あふれる「横山」ならぬ「多摩のヨコガオ」を探して記録し、社会に発信していきます。

帝京大学総合博物館 Teikyo University Museum TUM